カルロス・フエンテスの『アウラ』についての一考察
——魔術的リアリズムの視点から——

On Carlos Fuentes's *Aura* :
From the Viewpoint of Magical Realism

依藤　道夫
YORIFUJI Michio

Summary

In this paper Carlos Fuentes's *Aura* is discussed especially from the viewpoint of so-called "magical realism".

A Mexican famous novelist Fuentes was also a diplomat and had a very international background. Thus he continued to search for the identity of his mother country Mexico and himself throughout his career as an author.

Aura is one of the well-known "magical realism" literary works of Latin American literature. In this fearful Gothic novel Felipe Montero happens to enter into the strange and illusive space (house) which seems to be quite isolated from this world. In there he meets a very old lady and her beautiful niece Aura, who are, in fact, one person, not two. The old lady struggles to call back her youth through her another self by keeping the young man Montero beside herself in her dark world.

Being influenced by *Ugetsu Monogatari*, written by Akinari Ueda in the 18th century Japan, Fuentes tries to inquire into the inscrutable depth of the very mysterious and tenacious human heart, the endless illusion and desire of it through the transformation from reality to fantasy or vise versus which meaningfully characterizes "magical realism" literary world.

In this paper, while some features of *Aura* being discussed, what the author most wished to describe in it is mainly examined from the "magical realism" viewpoint.

I very much thank Professor Vera Kutzinski and Professor emeritus & Mrs. Fred C. Robinson of the English Department of Yale University for their warm support to my study.

I also thank Sterling Library and Binecke Rarebook Library of Yale for their warm help to me.

1.

メキシコ（Mexico）の作家カルロス・フエンテス（Carlos Fuentes，1928—）は、パナマ生まれだが、広く国際的な背景を持っている。父が外交官だったからである。バルザック（Honoré de Balzac，1799—1850）等フランス文学の影響も受けているフエンテス自身も、後年、駐仏大使を勤めたことがあった。

ともかく、彼フエンテスは、南米諸国やアメリカ合衆国で教育を受け、中米メキシコを祖国としていて、多分に無国籍的な側面を有し、木村榮一氏も指摘する通り、祖国メキシコや彼自身のアイデンティティを問い質し続けた作家でもある。

そのフエンテスの代表作の一つが中篇小説の『アウラ』(*Aura*, 1962) である。

男は狩りをし、戦い、女は企(たくら)み、夢を見る。彼女は幻想の母、神々の母である。女は第二の視覚を持ち、欲望と想像の果てへ飛び立つ翼を持っている。…

神神は男のようであり、女の胸の上で生まれ、そして死ぬのである。

これは『アウラ』の冒頭に掲げられたジュール・ミシュレ (Jules Michelet) の一文である。

『アウラ』はいわゆる「魔術(マジカル)的リアリズム」(magical realism) の手法による傑作の一つである。いかにも同技法による作品らしく、極めて幻想的な作品である。明らかにゴシック・ロマンス (Gothic romance) の系譜にも属しており、読者に深い恐怖心を呼び起こしもする。1962年に発表されたこの特異な作品は、主人公の歴史家フェリーペ・モンテーロ (Felipe Montero, 27才) が新聞の広告で見つけた仕事先の「ドンセーレス街815番地 (Donceles 815 — 以前は69番地 —)」の不思議な家における甘美にも異様な体験を描いたものである。

広告には、

「若い歴史家を求む、仕事に忠実で、身ぎれいたること。口語のフランス語の完全な知識を有すること」

『アウラ』(木村榮一訳、岩波書店)

とあった。更に、

「月に4千ペソ、食事付き。居心地よい寝室付き書斎を提供」

(同上)

ともあった。最初からモンテーロにぴったりの仕事だった。ここにもある種「宿命的」なものが感じられる。モンテーロは、かつてスカラシップを受けてソルボンヌ大学 (Sorbonne) で学び、目下、月900ペソで私立学校の助手をやっている身分だった。

従って、広告の金額は彼にとり破格の月収となるわけである。彼は旧市街のドンセーレス街に歩み入った。光のない風変わりな家に、老婆のドーニャ・コンスエロ (Doña Consuelo) 夫人を訪ねる。そこには老婆の姪のアウラ (Aura) という若い娘もいた。

2.

信仰の光に満たされた世界に背を向けたとたんに、彼女の姿が目に入るだろう。ベッドの足もとでつまずいた君は、ぐるりと大回りして枕もとに立つだろう。そこに、巨大なベッドに埋もれたようになっている小さな人影が見えるだろう。君が手を差し出すと、

相手の手ではなく、フェルトのように柔らかくて肉の厚い皮膚に触れる。黙々と何かをかじっている生き物の耳だ。その生き物が赤い目で君を見つめる。君はほほえみを浮かべると、女性の手のそばでおとなしくじっとしている兎を撫でる。ようやく彼女の手が君の手に触れる。彼女の冷たい指が長い間君の掌の上に置かれている。彼女の手が君の手を裏返し、レース織りの枕に近づける。指を伸ばしている君の手が彼女の手から離れて、そのレース織りに触れる。

「フェリーペ・モンテーロと言います。新聞の広告を読んできたんですが」

「わかっています。ごめんなさいね、椅子がないんですよ」

『アウラ』(木村榮一訳、岩波書店)

コンスエロ夫人の夫リョレンテ将軍(General Llorente)は60年前に死んでいた。老夫人は、自分はもう先も短いので、夫の書き残した原稿を整理、出版したい、よってモンテーロにその手伝いをしてほしい、というのである。この家に滞在してその仕事をしてもらいたいというわけである。夫人は姪のアウラを紹介するが、彼女の眼は済んだ緑色で、海のようである。アウラの現れ方はいきなりで、しかもその気配を感じさせない。彼女は緑色の服を着ている。

夫人の部屋も暗くて陰気だが、食堂もゴシック調の作りで、湿気や寒気が感じられる。アウラの案内で最初にそこへ入った時、テーブルには腎臓料理やびんにかびのついたワイン、トマトなどが並んでいる。ワインは赤くてどろりとしている。テーブルには4人分のセットが置いてあるが、コンスエロ夫人は体の調子がよくない、ということで、出て来れないという。モンテーロは、アウラに気を留めるが、やがて彼女は急ぎ足で退出してゆく。

モンテーロが老婆の部屋へ入ってみると、彼女は、その小さな体を動かして、拳を振り回しながら、祭壇の聖画像に挑んでいる。そこにはキリストやマリアの画像とともに、笑っている悪魔のそれもあった。そこにはアルコールに漬けられた内臓や銀の心臓なども並べられていた。

リョレンテ将軍の原稿はフランス語で書かれているが、それほど立派な文章ではなかった。この将軍の一代記を綴った原稿は、黄色く変色しているのであった。モンテーロはその文章を直しながら仕事に取り掛かってゆくのである。

別の折の食堂の場面であるが、モンテーロは、スープを飲むコンスエロ夫人の年令を推定することができない。リョレンテ将軍のほうは1901年に死亡している。将軍の回想録の中には「知り合った時、彼女(コンスエロ夫人)は15才だった」と記され、彼女の緑色の眼に堕落させられたと言っている。49才時に夫の将軍が亡くなっている。モンテーロの計算では、老夫人は今、109才になっていると思われる。

3.

次第にモンテーロは、アウラがこの暗い家の中で、コンスエロ夫人に支配されていて、この家から逃げられないでいるのではないか、と疑い始める。頭のおかしいあの老婆が己の昔の美しかった頃の姿、その幻想に執着していて、アウラはその代役のようなことをさせられているのではないか、という風に考える。

モンテーロは、台所でアウラが髪を振り乱し、血まみれになりながら雄山羊を解体して

いるのを見るが、すぐ老婆の部屋へ行ってみると、老婆も片方の手を振り上げ振り下ろす激しい動作をしている。まるで動物を解体しているような動作である。アウラの動作と同一のそれなのである。このあたり、シドニー・シェルダン（Sydney Sheldon）のミステリー小説の一場面を思わせるような不気味な光景である。モンテーロは、彼自身の見た老婆とアウラ二人の出てくる恐ろしい悪夢を夢遊病者のそれと思う。アウラの部屋へ行ったモンテーロは、20才そこそこのはずのアウラが40代に見えるのに気づく。アウラと寝室でひとときを共にしたモンテーロは、やがて部屋の片隅にコンスエロ夫人が坐っていて、夫人とアウラがまた同一の動作を繰り返していることを知るのである。

君はふたたび彼女の名前を口にする。目を開けるとベッドの足元に立ってほほえみを浮かべている彼女の姿が見える。けれども、彼女は君を見てはいない。彼女はゆっくり寝室の片隅の方へ歩いてゆき、腰を下ろす。彼女は膝を立て、その上に腕を載せる。影になった膝の向こうには目を凝らしても何も見ることのできない闇が広がっている。彼女はその暗闇から伸びている皺だらけの手を撫でている。徐々に闇に目が慣れてくると、老夫人のコンスエロの足が見える。その時はじめて、夫人が肘かけ椅子に腰をかけていることに気がつく。コンスエロ夫人は首を振りながら、君にほほえみかける。ほほえみを浮かべて首を振っている夫人の動きに合わせて、アウラも首を振っている。二人は感謝をこめて君にほほえみかける。ぐったりしてベッドに横たわっている君は、老婆はたぶん最初からこの部屋にいたのだろうと考える。

彼女の動作や声、ダンスを思い出す。

君は、夫人は最初からあそこにいたはずがないと懸命になって自分に言い聞かせる。

二人は同時に立ち上がるだろう。コンスエロは椅子から、アウラは床から立ち上がるだろう。

二人は君に背を向け、老女の部屋とつながっているドアの方へゆっくり歩いてゆく。聖画像の前で献灯が揺れている部屋に入り、後ろ手でドアを閉めるだろう。眠っている君をアウラのベッドに残したまま。

『アウラ』（木村榮一訳、岩波書店）

物語の最終場面で、コンスエロ夫人が外出すると聞いたモンテーロがアウラの部屋へ行くが、結局ベッドの中にいたのは白髪の老いさらばえたコンスエロ夫人だったことを知る。

老婆は言う。

あの子は戻ってくるわ、フェリーペ。二人で力を合わせて彼女を連れ戻しましょう。しばらく力を蓄えさせて。そうしたら、もう一度あの子をよみがえらせてみせるわ…

『アウラ』（木村榮一訳、岩波書店）

4.

アメリカ合衆国の20世紀作家トルーマン・カポーティ（Truman Capote，1924—）は『遠い声、遠い部屋』（*Other Voices, Other Rooms*，1948）や『ティファニーで朝食を』

(*Breakfast at Tiffany's*, 1958)、『冷血』(*In Cold Blood*, 1966) などで知られている。

若い頃は「神童」とも呼ばれていたニューオーリンズ出身のこのアメリカ南部作家は、繊細で幻想的なゴシック調の作品を書いたが、彼の代表的短篇の一つに「ミリアム」("Miriam") という傑作がある。この作品中の不思議な少女ミリアムは、雪の夜のニューヨークで、ミラー (H.T. Miller) 夫人の前に姿を現わす。取り立てて言う程の友人を持たないミラー夫人は、一人でイースト・リヴァー (East River) 近くの快適なアパート (小台所のついた2部屋のそれ) に住んでいる。彼女は、広告を見て近くにある劇場の映画を見に行くが、そこでミリアムと出合うのである。少女は銀白の長髪を腰まで垂らし、身体はやせて、きゃしゃなつくりだった。

この少女がミラー夫人のアパートを訪ねてくる。夫人は当惑気味である。少女は10才なのか、11才なのか、夫人にはよくは分からない。

雪の日にミラー夫人の前に現れた奇妙な少女ミリアムは、実体の不確かな存在であり、「夫人がミリアムに対して失った唯一のものは自身のアイデンティティだった」("the only thing she lost to Miriam was her identity") という作中の一文は大変暗示的である。

ミリアムは孤独なミラー夫人が作り出した彼女の分身的な幻影だったのであろうか。

幻想と現実の両世界を往来するカポーティ独自の特徴は、魔術的リアリズムの手法にも通じ、フエンテス等ラテン・アメリカの作家たちにも通底するところがあるように思える。フエンテスの『アウラ』におけるコンスエロ夫人とアウラの関係は、カポーティの「ミリアム」のミラー夫人と少女ミリアムのそれを思わせるのである。

5.

フエンテスは、日本の上田秋成 (1734—1809) の『雨月物語』に関心を抱き、その映画や原作に興味を持った。『雨月物語』は江戸中期の安永5年 (1776) に出た古典的作品で (作品は筆名「剪枝畸人」で発表された)、秋成は「適 鼓腹の閑話ありて、口を衝いて吐き出す」と言っている。9篇の怪異な幻想的な物語から成っている。

巻の二の「浅茅が宿」は、下総国の葛飾郡真間郡の勝四郎が、農業を嫌って、美しい妻宮木を一人家に残したまま、商売の為につてを頼って京都へ上る。秋には戻ってくるからと言い残したが、戦乱の世に邪魔されて、果たせなかった。ようやく7年後に故郷に帰り着いてみると、荒廃した我が家に衰え切った妻がいた。彼女はさめざめと泣き、夫もこれまでの曲折した経緯を話す。一つの床に臥し、朝目覚めた勝四郎は、実は人の住まぬ廃屋に一晩寝ていたことを知るとともに、妻の墓を見出す。そして近くの老人がかつて亡くなった宮木を葬って墓を作ってくれていたことを知る。老人は勝四郎に、待ち焦がれつつ死んだ宮木の魂が戻り来って「旧しき恨み」を述べたのであろう、念比に弔ってあげなさい、というのであった。

この下総の真間という所は、真間の手児女の故事で知られるところでもある。作者秋成は、

いにしへの真間の手児奈をかくばかり
恋ひてしあらん真間のてごなを

という田舎人の詠んだとする歌を掲げて、宮木の人生の哀れさを語っている。

フエンテスがモンテーロとアウラ（実はコンスエロ夫人）を描くに際して、秋成の勝四郎と宮木の亡霊の物語から何らかの示唆を受けていると言えよう。

同じ秋成の『雨月物語』巻の四の「蛇性の婬」の影響も少なからず見られるのであろう。この作品は、紀州の三輪が崎の庄屋大宅竹助の次男豊雄が美貌の女性に化けた白色の大蛇に取り付かれる怪談である。件の女性新宮の里の県の真女児の屋敷を訪ねた豊雄は、彼女と少女に大いにもてなされる。ほどなくその家が無人の廃屋だったことを知った豊雄は、姉の嫁ぎ先の大和の石榴市に身を避けるが、真女児はそこへも現れる。結局、彼女にうまく言いくるめられて夫婦になるが、みなで吉野に遊山に行った折、大和神社の神官が女の正体を見破る。親や兄に孝行したいとして紀州に帰った豊雄は、請われて元都の采女だった富子と結婚するが、真女児が富子に取り付いたので、小松原の道成寺の和尚に頼み、白蛇、大小２匹を捕らえてもらうことになる。富子は病で亡くなるが、豊雄は生き長らえた、という恐ろしい物語である。

事の発端は、豊雄が生来都風好みで、仕事に精出す性格でなかったことにあるが、やはり一面で教訓的なこの作品においても、化物の住む打ち捨てられた廃屋という異界設定が行なわれており、化物たる真女児の豊雄に対する執念の深さが見事に描き出されている。

フエンテスの『アウラ』は、こうした「蛇性の婬」からもヒントを得ていると考えてよいであろう。豊雄と真女児（白蛇）の関係は、モンテーロとアウラ（コンスエロ夫人）のそれと明らかに平行関係にある。

6.

アメリカ南部ミシシッピーの作家ウィリアム・フォークナー（William Faulkner, 1897—1962）はラテン・アメリカ文学の「魔術的リアリズム」の作家たちにも少なからぬ影響を与えていると考えられるが，彼の傑作短篇小説「エミリーのバラ」（“A Rose for Emily”, 1930。『これら十三篇』*These Thirteen*（1931）に収録）のヒロイン、エミリー・グリアスン（Emily Grierson）は、気紛れな恋人のヤンキー男（Yankee）、ホーマー・バロン（Homer Baron）を毒殺して、その死体と数十年間にわたって同衾する。エミリーは南北戦争（the Civil War, 1861—65）に敗れた南部、とりわけ深南部（the Deep South）の怨念を含む奥深い諸情念を象徴し、ホーマー・バロンは南部から見た北部を象徴しているとする見方もあるが，エミリーとホーマー・バロンのストーリーは極めて異様で，ゴシック色に満ちみちたものではあるものの、やはり現世的な範囲に踏み留まってはいる。一方，フォークナーの深い影響を受けたコロンビア（Colombia）の偉大な作家ガブリエル・ガルシア・マルケス（Gabriel García Márquez, 1928—）の代表作『百年の孤独』（*Cien Años de Soledâd*（*One Hundred Years of Solitude*）, 1967）に登場するプルデンシオ・アギラル（Prudencio Aguilar）やジプシーのメルキアデス（Melquíades）の亡霊は、この世に何度も平気で出没し、徘徊する。また、ホセ・アルカディオ・ブエンディア（José Arcadio Buendía）の死霊は、クラビコードを聞きながら広間の暗がりに坐っていたりする。マルケスの亡霊は、いとも簡単にあの世とこの世を往来する。

それに対して、『雨月物語』の宮木の亡霊は非常に日本的東洋的で、哀愁に満ちており、不気味だが極めて繊細でもある。真女児の執念もやはり日本的、東洋的であると言うべき

であろう。

『アウラ』における老女コンスエロ夫人と「老女のすることをそのまま真似るだけだといわんばかりに、コンスエロ夫人と全く同じ動作を繰り返す」アウラは、実は一体の存在であったのだが―両者とも緑色の眼を有している―、彼女たちは、祭壇の「ホルマリン漬けにされた心臓」のようにこの世に留まってありながらしかもほとんど異界の存在であり、そこに迷い込んだフェリーペ・モンテーロは闇夜の悪魔にうなされながら、また冷えた腎臓料理を食べ、血のようなワインを飲みながら、催眠術にかけられたように、夢遊病者のように行動し始めている。コンスエロ夫人やアウラと同じような動作になって来ているのである。作品は彼が同衾するアウラ、つまりは老いさらばえたコンスエロ夫人が次のように言うことで終っている。

あの子は戻ってくるわ、フェリーペ。二人で力を合わせて彼女を連れ戻しましょう。しばらく力を蓄えさせて。そうしたら、もう一度あの子をよみがえらせてみせるわ…

『アウラ』(木村榮一訳、岩波書店)

『アウラ』における「浅茅が宿」的、「蛇性の婬」的、『雨月物語』的な要素を見ることは、作者フエンテスの『アウラ』の創作意図や彼の女性観(にょしょうかん)、死生観の一端を知るのにも有益であろう。

7.

文学というものが人間や人の世のより深い真実を描き出そうとするものであるならば、そうした意味において「魔術(マジカル)的リアリズム」の手法は、たとえばかつての欧米の「意識の流れ」(stream of consciousness)の技法などと同様に、文学表現法における新領域を大胆に切り開かんとするものであった。

欧米の芸術・文学の世界にその根があるとは言え、中南米のラテン文学の世界に花開いたこの新種の文学手法は、実は単なる文学技法の範囲に留まるものではなく、ラテン・アメリカの精神風土に深く根差したものなのである。それは極めて社会的、歴史的、民族的、風土的、そして慣習的な土壌つまりはラテンの文化や生活背景から必然的に生じたものなのである。結局のところ、欧米的な根は、触媒的作用を果たしたものと言うべきであろう。

現実と非現実の交錯や融合をその特色とする魔術(マジカル)的リアリズム文学の最大の傑作はガブリエル・ガルシア・マルケスの『百年の孤独』であるが、『アウラ』も、むしろ小篇ながら、この分野の傑出した代表作の一つであり、しかも作品としての完成度も高い。ジャック・ジョゼ(Jacques Joset)は『アウラ』を次のように評している。

『アウラ』(一九六二)はやや長目の中篇、というか、むしろふたつのジャンルの美学的基準にのっとった短い長篇である。フェリペ・モンテイロの冒険は口実にすぎない。小説的な虚構は影がうすれ、定かでない想像の渦のなかに消えてゆく。作中人物がその真の存在を発見するのは、彼らが信じている、そして彼らの奥深い生の組織そのものである、より高次な虚構の世界のなかでのことである。フエンテスはフランスの≪ヌーヴォー・ロマン≫のある種の技法を借り、両者を攻め立てる戦術を取りつつ社会の現実の

なかの人間存在を解明する。

ジャック・ジョゼ『ラテン・アメリカ文学史』
（高見英一・鼓直訳、白水社）

ウェンディ・B・ファリス（Wendy B. Faris）はフェリーペ・モンテーロがリョレンテ将軍になってゆくこと（変質）（Felipe Montero's transformation into General Llorente）に言及しつつ、魔術的リアリズム小説が注意深く「神聖な囲い地（境域）」（sacred enclosures）を作り上げて、取りかかることを論じている。アウラの家（Aura's house）やガルシア・マルケスの「マコンド村」（Macondo）などである。そしてファリスは、「魔術的リアリズムは時間や空間に関する我々一般の習慣のみならず、アイデンティティに関わる我々の感覚をも同様に新たに方向づけるのである」とも述べている（『魔術的リアリズム——理論、歴史、社会』Lois Parkinson Zamora and Wendy B. Faris, Editors: *Magical Realism—Theory, History, Community*, Duke University Press , 1995）。

フェリーペ・モンテーロは、アウラの異界（ファリスの言う神聖な囲い地・境域）に入り込んでしまう。或いは招き入れられてしまう。「69番地」が「815番地」に変わっていたというそのアウラの住む家——この変更も暗示的ではある——、その家に入る時、役に立たない犬の頭部をしたすり減った銅製ノッカーのあるドア、指を触れただけで開いたそのドアから入る時、モンテーロは通りにバスや車の長い列が連なる日常的な現実世界を後にすることになる。中庭らしい狭くて真っ暗な路地を通るが、ドアとその内側の暗い路地が、あたかも『古事記』の世界の現世と黄泉の国の間を繋ぐ「羨道」のように、異界と現実世界の間を分ける境界域となっているのである。

路地の向うの異界にあっては、ファリスの表現を借用するならば、現実から非現実への「変質」（transformation）が生じるのである。コンスエロ夫人の若返りへの凄まじいばかりの妄執、祈りは、一にかかってモンテーロの「変質」にあるとも言えるのである。恐らく腎臓料理と赤いワイン（血）は、老夫人にとっての生命のエキスなのであろう。コンスエロ夫人にとり、自らがアウラと化しおおせ、モンテーロが夫リョレンテ将軍に近づけば、何よりのことだったのであろう。

こうして、異様で怪しく不可思議な『アウラ』の世界は、作者カルロス・フエンテスにとり、人間の性や精神世界の深奥に潜む神秘に肉迫するための真摯にして鬼気迫る実験場だったのであり、その際にメキシコ人（ラテン・アメリカ人）たるフエンテスにとって最も有益かつ必然的な手法は、ラテンの風土に根差した魔術的リアリズムのそれだったのである。

本研究はイェール大学英文科（Department of English, Yale University）のヴェラ・クチンスキー教授（Prof. Vera Kutzinski）とフレッド・C・ロビンソン名誉教授及びヘレン・ロビンソン夫人（Prof. Fred C. Robinson & Mrs. Helen Robinson）に負うところ大である。改めて感謝の意を表するものである。同大学のスターリング図書館（Sterling Library）、バイネッキ希覯本図書館（Binecke Rarebook Library）にも心より御礼申し上げたい。